

計画案の夢

アンビルト・プロジェクト

アトリエCOSMOS

'93～'95

⑤

平塚計画

文=白鳥健二

写真=大橋富夫



平塚計画

—アブスに吸い寄せられて PART II—

人間の自我。これは自然の調和を破壊するもの。そうならないためには、大自然の調和に自らを同調させていかなければならぬ。調和の中に存在する生命同士の統合力。大生命を形成する偉大なる結束力。愛の力。そこから得られる大きなエネルギー……。

その愛のを感じるこの瞬間。
そんな力を感じることの出来るこの一瞬一瞬。
そしてその連続。

その連続を感じる私の肉体。

私の体のすべての器官が、本来与えられた機能に従って、今正常に反応している。

血液が、体の隅々まで流れ込んでいく。

私の器官の働きを妨げる重圧は、何時もない。宇宙のエネルギーが、この肉体に確実に伝わってくる。この肉体は生きている喜びを感じている。この肉体は、今、かすかな愛を感じていて。

私の肉体は、今、宇宙の彼方から到達するエネルギーの波動と同調している。

天から降ってくる悲みは、人間の身体を通り抜けて、それが言葉となり、音楽となり、絵となり、物となり、また歩き方となり、表情となり、手の動き……etc.となる。そして、それらすべてが統合して生命の源となり、大きなかたまりとなり、やがては巨大な生命となり、この宇宙を形成しているのだろうか。

—1976.10.14 私のスケッチノートより—

“第一の教育のタイプは、我々の認識や理解や判断力を大きくし、宇宙の構造や秩序や原則を常に観る力にまで引き上げることをネイライとする。この宇宙観は、スペチ有限世界の過渡的な現象や幻想的な現実を通じて、過去と現在と未来を見通し、ツモ正しい方向を人間に示すものです。それは一切のものも例外なしに包含するもので、一名、「愛」と呼ばれます。それはまた、無限に噴出するヨロコビで、一名、「信」とも呼ばれます”。マクロバイオティックの創始者である桜沢如氏はこう指摘する。

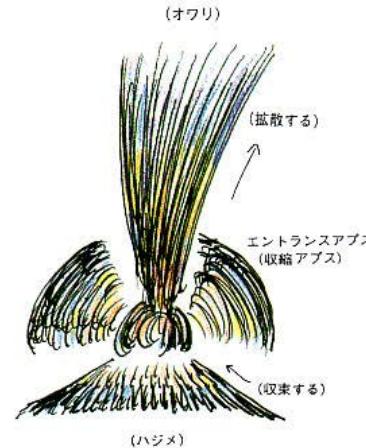
前号の「鎌倉・小町計画」は、建物全体が段状に構成された、言うならば「階段建築」のようなものであった。建物の天井の正面奥にアブスが控えていたが、平塚計画はそれとは対照的で、建物の一番手前の正面中央に、同様のアブスが大きな口を開けている。

人々は、まず最初にこの大きな開口より内部に吸い込まれる。幅員12mの道路に接した間口9mの敷地に位置するアブス。ここから突然吸い込まれる。このあと、奥行38mの末広がりの形態をしたメガホンのような空間が展開する。正面人口の



△今、かすかな愛を感じている。

今、大宇宙の彼方から到達するエネルギーの波動と同調している。
——鎌倉・寿福寺墓地にて

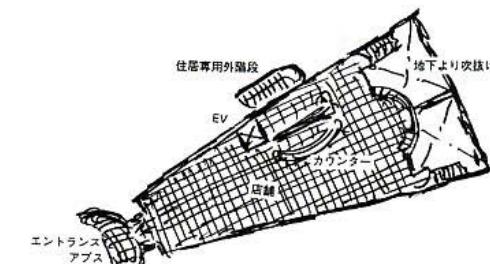


△平塚計画イメージスケッチ①

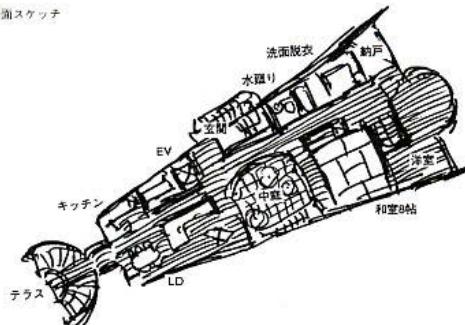
「ハジメ」……1階のエントランスアブスに吸い込まれた人々は、強烈で一気に収束され氣圧が上がる。
ラッパ状の空虚の内部で、動線は徐々に拡散し、一度上昇した氣圧は下がっていく。



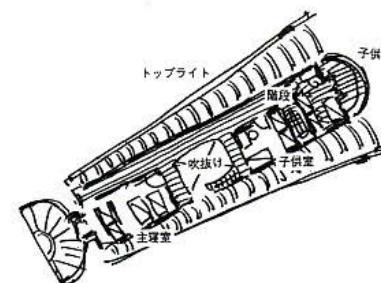
▲平塚計画模型



△1階平面スケッチ



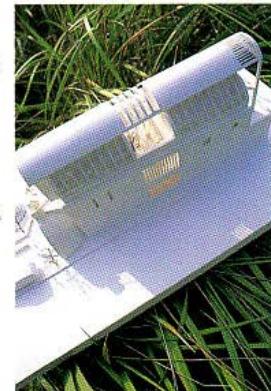
△2階平面スケッチ



△3階平面スケッチ



△天から降ってくる悲みは人間の身体を媒として、言葉になったり、音楽になったり、絵になったり、物になったり……。それらすべてが、生命的の源となり……。
——鎌倉・寿福寺墓地にて



▲平塚計画模型

エントランスアブスは言うならばマウスピースのようなもの。

建物は、店舗併用住宅で、一部の地下階と地上階は、この場所で三代続いた老舗の酒蔵だ。2・3階は住居空間。中央に中庭を内包した2世帯用の住まいとなっている。1階のエントランスアブスに吸い込まれた動線は、喉元で一気に収束され、そこで突然気圧が上がる。喉元を通り抜け、末広がりの空間の内部で収束された動線は拡散し、一度上昇した気圧は徐々に下がっていく。拡散した動線は、奥へ行くほど多様化し、様々な商品と出会う仕組みとなっている。動線は、最終的に一番奥の地下室にたどり着く。そこはもっとも静かで、時間の停止した、地の底である。空間の「オワリ」である。

ここでしばらくの時を過した客は、意識をとり戻して再び入口の方向、つまり「ハジメ」の方角へ引き返す。いったん下がった気圧が、またゆっくりと上昇しあげる。人口付近で気圧は再び最大となり、アブスから外界の大空に向かって拡散していく。人はこのラッパ状の空間の入口のアブスと地の底にある。この店の心臓部である地下室を往復するたびに拡散と収束を繰り返す。そのたびに「ハジメ」と「オワリ」を繰り返す。

桜沢氏は言う。“この世、この相対、有限、無常のモノは、スペチ始めがあり、終りがあります。しかし、「ハジメ」こそ、マチガイなく「オワリ」のハジメです”と述べる。「ハジメ」と「オワリ」という二つのもの、対立関係にある「対」はすべて同極がダイナミックに関連しあう一つの関係にある。

「鎌倉・小町計画」においては、アブスという1/4の球形の持つ吸引力が人々を無意識のうちに、地上5階の天辺まで引き寄せた。そしてそこで意識が注入され、人々は昇って来た階段を降りる。意識と無意識を交互に体験しながら、「ハジメ」と「オワリ」を同時に体験するものであった。

“第二の教育のタイプは、技術や概念をつなぐ込み、ツイニル人間本来の最高判断力、すなわち本能というものを完全に隠蔽し、窒息せしめるモノです。現在見るアラユル種類の重大なアヤマチや犯罪は、大部分この第二のタイプの教育を長年受けた人々によります。戦争、搾取、原子爆弾など、その実例は無数です。今は昔、東洋の教育はミナ、第一のタイプでした。現在、陽性的文明（西洋文明）が、陰性的文明（東洋文明）を支配しているのです。万物流転（サムサーラ）！ スペチ始めあるモノに終りあり”と、桜沢氏は結ぶ。

西洋人にとって、対立するすべての絶対的一体性を認めるとは大要むずかしい。相容れないと信じ込んでいるものが、実は同じものの別側面であるというのは非常に逆説的に思えるからだ。しかし東洋においては、「あらゆる対立の超越」がなければ、悟りに至ることは出来ないと考えられてきた（P.カブラー）。そうである。